

## 屋久島での観察会の報告

「西部地域の人家跡を訪ねて」

日時 2015年5月30日 9:00-12:00

場所 半山（屋久島・西部地域）

参加人数 21名

講師 2名

概要 屋久島の西部地域は、屋久島の海岸域の中でも最も急峻で、現在は人が住んでいません。しかし、この地域にも昭和40年（1965年）頃まで人が住んでいました\*1。西部地域のうち、半山、川原、瀬切などには、人が住み、様々な活動をした跡が残っています。

今回は、半山地域の人家跡を訪ねました。半山は、永田から、現在の西部林道を通して、約10kmの場所にあります。現在の西部林道開通したのは昭和42年（1967年）です。（開通したといっても、未舗装の1車線の道です）。ですから、西部地域で人が暮らしていた頃は、最寄りの永田に行くにも山道を歩くか、船で行くしかありませんでした。おそらく、歩くと3、4時間はかかったのではないかと思います。

当日は、西部林道の半山1号橋に集合し、簡単な自己紹介と、この地域の説明をしました。永田区長の野村さんにも、いろいろな話をさせていただきました。

半山川右岸沿いにゆっくりと下っていき、石垣や、炭焼き窯、大きなアコウなどを見ながら、人家のあった場所へ向かいました。人家のあったと思われる場所は、お皿や茶碗などの陶器や、鍬などの鉄製器具、五右衛門風呂などがありました。また、竹が一カ所だけ狭い範囲に生えている所もありました。かつて、人が植えたものだと思います。

人家の跡を見ながら、野村さんにお話を伺いました。

- ・小学4年生の時に、ここに1ヶ月くらい滞在した。昭和36年（1961年）頃のことである。
- ・当時、林道はなかった。
- ・家の近くにミカンの木があった（今回は確認できませんでした）。
- ・ここには4件ほどの家があり、長屋もあった。
- ・住んでいた人は、男性は林業に携わり、女性は畑を耕していた。
- ・ここに来ると、お米が食べられてうれしかった。
- ・半山の船着き場は、半山川の河口の北の岩陰にあり、そこに行く道が、岩をくりぬいたりして続いていた。
- ・物資は、船で運んでいた。
- ・切った木も、海から出していた。急斜面で木をうまく落とすのが難しく、危険だった。

子供は近づいてはいけなかった。

- ・畑の周りには、シカの罾がかけてあり、子供は近づくなと言われた。肉といえばシカ肉だった。
- ・竹は、釣り竿にも使っていた。

さらに下って海の見えるところまで行き、船付き場があったという岩場を遠くから見ました。そこから引き返し、大きなガジュマルの木を見たり、時折、サルやシカを見たりしながら、半山川の右岸を上りました。前日に、口之永良部島が大噴火し、火山灰がうっすらと積もっており、風が吹くと灰が少し舞いました。帰る途中、下から見ると、石垣を組んで段々にしているのがよく分かりました（後で野村さんから、家があった所だったらしいと伺いました。）。

帰りは少し、早めに歩き、ちょうど12時に、西部林道に戻りました。戻ってまもなく、雨が降り始めたので、早々に解散としました。

私は先頭の方について、小学生の近くにいることが多かったので、まじめな解説というよりは、つつい雑談になりがちでしたが、楽しんでもらえたでしょうか？私の話はともかく、どんな場所だったのかを、見て、感じてもらえたなら、観察会としては成功だったと思います。

半山は永田とのつながりが強かったと聞きます。永田区長の野村さんに、ご自分の体験をお話いただいたことで、このことが実感できたのではないかと思います。また、永田在住の方に、たくさん参加していただくことができたのも、良かったと思います。

最後になりましたが、永田区長の野村さん、広報にご協力いただいた永田公民館、永田小学校の皆様、チラシを配っていただいた、屋久島町環境政策課の木原さんに感謝します。

\*1 大正時代の地図には、この地域に集落が記されています。少なくとも大正から人が住んでいたようです。

#### 参考文献

松田高明（1997）世界自然遺産の島 屋久島の不思議な物語 秀作出版  
昭和30年代の半山のことが書かれています。



半山1号橋に集合



ガジュマル



石垣が組んであります。



五右衛門風呂がありました。



これは何でしょう？



松ヤニをとった跡のようです。



飯ごうとなにやらプロペラのような物